

# Living the Lotus 4

*Buddhism in Everyday Life*

2026  
VOL. 247



## 3月22日、立正佼成会ブラジル教会が 前田貴史国際伝道部長を迎え日曜参拝

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

### Living the Lotus Vol. 247 (April 2026)

【発行】立正佼成会 国際伝道部

〒166-8537

東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F

Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224

E-mail: [living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp](mailto:living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp)

編集責任者: 前田 貴史

編集チーフ: 三川 紗知

校閲者: 小坂 和正、菊池 克之

編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教)というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

## 董ほどな小さき人に

庭野日鏡  
立正佼成会会長



### 漱石の句と誕生偈

明治三十年、小説家の夏目漱石は、畏友の正岡子規に「董ほどな小さき人に生れたし」という句を送っています。日清戦争に勝利したあと、近代国家へと向かう高揚した空気が漂うなかでのことですが、この句には漱石の哀しみにも似た思いがにじんでいるように感じられます。

人が、自身の人格を尊重し、誇りをもって生きることは大切なことです。しかし、その理解を間違えると、自己を過大に誇ったり他を威圧したりするような慢心となり、ときに人びとがこぞって戦争を受け入れる危険な気分さえ蔓延します。そうした現実を目の当たりにして、「自分は路傍にひっそりと咲く董のように、目立たなくともたくましく生き、目にした人の心を慰め癒やす存在でありたい」との願いが、この句にはこめられている気がするのです。

四月八日は、釈尊の降誕を祝う法会ですが、釈尊が誕生されてすぐに発せられたと伝わる誕生偈「天上天下唯我独尊」の意味をあらためてかみしめると、まさに漱石のそのような思いに通じる謙虚な気持ちと内省、そして自他を真に尊ぶ大切さが教えられていると受けとめられます。

人はみな、各自、この世にただ一人の尊い存在です。そのことに気づくと、有頂天になって抱く野心や、他と争うことがいかに愚かなことかわかります。同時に、自他を尊重すること、つまりみんな仲よく生きることが、人間として生まれてきたことの意義であり、その上さらに、「感謝と慈悲の心が何よりも大事」と教えられる意味がよくわかってくるのです。

尊大になって自己満足を得る生き方よりも、たとえ目立たない「小さき人」であっても、人の心に安らぎを与え、和を築いていくことがずっと幸せであるということです。



## 私たちが生まれてきた意義

漱石は「菫」ですが、みなさんは、どのような花のようでありたいと思われるでしょうか。

この季節なら、辛夷や桜やタンポポも愛らしく、香りで安らぎを運ぶ沈丁花なども挙がりそうです。「花の美しさに序列はない」と喝破した方がおられるように、どの花も精いっぱい本分をまっとうして咲いていて、そこには優劣も美醜による差也没有ありません。

哲学者の西田幾多郎先生は、いみじくも、

「花が花の本性を現じたる時最も美なるが如く、人間が人間の本性を現じた時は美の頂上に達する」

とっています。

私たち仏の教えを学び生きるものからすると、人間の本性は仏性にほかならず、そのことを各自が自覚し、その仏性を発揮するとき、私たちの人生は花と同じく、本分をまっとうしたことになるということです。そこに、人が人として生まれてきた大きな意義があります。

ただ、各自の人生の意義を自覚するタイミングは人によって違いますから、とくに若い人びとが焦ったり悲観したりする必要はありません。

私の好きな道歌に、

「世の中はただ何となく住むぞ善き心一つをすなほにはして」（佐善雪溪）があります。

心を楽にして、憂いも怒りも求めるものも少なくて、目立たずとも気持ちはいつも素直なままでいようというほどの意味です。

不安や不満が募るような時代にこそ、この姿勢で「まず人さま」の心を忘れずに、一人ひとりがそれぞれ個性豊かな花を咲かせたいものです。

（『校成』2026年4月号）



## 仏さまの智慧と慈悲を多くの人々に伝えたい

イタリア・ローマ法座 ニコラ・ティーニ

立正佼成会の教えに出遇ったのは、いつごろ、どのような経緯だったのですか？

1972年にローマで生まれた私は、18歳頃まで宗教には一切興味がありませんでした。しかし数年後、大学在学中に「東洋の精神性」という内容の授業でインドや中国、日本の仏教について学んだ時、初めてブッダの存在を知りました。当初、私はキリスト教でいう神のような印象を抱いていましたが、のちにまるで違うことがわかりました。それ以来、仏教に強い関心を持つようになり、さまざまな仏教書を読み進むうちに、13世紀の日本に日蓮聖人という偉大な仏教僧が実在したことを知ったのです。そして日蓮聖人が不屈の精神で法華経の教えを広めるために生涯を捧げたことがわかり、私はすっかり法華経に魅了されていきました。

その後、私はローマの日本文化会館の図書館で『Risshō Kōsei-kai』(1966年発刊)というタイトルの英訳本を見つけたのです。本を手にするると、立正佼成会の歴史や法華三部経を所依の經典とすることなどの説明のほか、落成直後の大聖堂やご本尊、法座修行、お会式、さらに第二バチカン公会議で開祖さまが教皇パウロ六世に謁見された写真などが掲載されていました。その本の内容に強く心を動かされた私は、巻末に記載されていた日本の立正佼成会本部にすぐに手紙を出しました。すると2週間ほどで返事がきて、私は感激と喜びで手紙を読みました。そこにはローマの大学に留学中の立正佼成会会員の名前と電話番号が記されていました。その人が現在、杉並教会長(東京教区長)をされている川本貢市さんだったのです。それが1992年頃だったと思います。

**その一冊の本が仏縁となったわけですね。**

その後、川本さんは私の家を何度も訪れてくださり、私だけでなく、家族や友だちにも仏教や法華



ニコラ・ティーニさん

経、立正佼成会の教えについてわかりやすく、熱意をもっていろいろとお話をしてくださいました。そのおかげで、小さいけれどもローマに素晴らしいサンガが誕生しました。そのように川本さんは私たちにとって非常に重要なリーダーであり、心から頼れる存在でした。しかし、留学期間を終えると日本での新たなミッションのために帰国しなければなりません。当時、私は20代で若かったこともあり、リーダー不在のローマで《これからどのように修行し、歩いていけばよいのだろうか》と思い悩みました。そして、ある時、出家して僧侶になろうと思い、1998年から在家僧侶として修行に励み、翌年には正式に得度を受けました。しかし、その後、《自分はやはり在家として修行することが大切なんだ。在家仏教の立正佼成会というサンガの中で法華経をしっかり学び、実践していきたい》と強く決心し、2003年に在家に戻り立正佼成会の会員として修行を続けることにしました。それから10年後の20

13年にローマセンターが開所し、水藻克年 さん（現・浜北教会長）がセンター長に就任され、私たちの新たな修行がスタートしました。

昨年10月、ニコラさんは立正佼成会国際伝道部で行なわれた翻訳会議に出席するために来日されましたが、現在どのような出版物の翻訳に携わっているのですか？

ローマセンターの開所後、私がすぐに取り組んだのは、英訳『法華三部経』のイタリア語訳でした。そして、開祖さまのご著書『新釈法華三部経』（全10巻）、『法華経の新しい解釈』、会長先生のご著書『心田を耕す』も同時並行で翻訳に取り組んできました。また、毎月の『Living the Lotus』に掲載される開祖さま、会長先生のご法話の翻訳もさせていただいています。しかし、翻訳作業は非常に神経を使い、集中力と根気が求められるため、時として強いストレスを感じることも多く、また孤独との闘いも味わってきました。そんな時、国際伝道部のスタッフの方々がメールやオンラインでの法座などで励まし、支えてくださったおかげで、私はそのような苦悩や孤独を乗り越えることができましたと思っています。そして今年、国際伝道部のスタッフの皆さんの長年にわたるご協力を得て、念願のイタリア語訳『法華三部経』が出版されることとなり、しかも有り難いことに会長先生から「まえがき」をご寄稿いただける予定になっています。



2025年10月、ローマ法座の会員（左）と共に来日したニコラ・ティーニさん。右端は川本貢市杉並教会長。



2025年10月12日、生誕地まつりに参加した浜北教会の会員と（後列中央）

法華経は難解な語句が多く、また深遠な教えを翻訳するにあたって大変なご苦勞をされたことと思いますが、特にどのような点に留意されてきましたか？

どのような文章を翻訳する時も同じですが、特に『法華三部経』を翻訳する際には、一つひとつの語句の意味が正確に余すところなく伝わるように、最もふさわしいイタリア語の表現を厳選して翻訳しました。また、誤解を招きやすい語句や表現については、慎重に訳語を選びました。何よりも私たちは学者ではありませんので、立正佼成会の会員のみならず現代を生きる人たちに理解しやすいような、できるだけ平易な言葉、法華経を「生きた教え」として日常生活で実践できるような訳文を常に心がけてきました。そしてブツダの真意、開祖さまのみ心に沿うように皆さんと何度も何度も話し合いを重ねて、翻訳作業を進めてきました。私としては翻訳をとおして、壮大な法華経の旅をしてきたような感じがいたします。

日本での滞在中、いろいろな体験をされたようですね。

翻訳会議は確かに来日の大きな目的ではありましたが、私にとって日本での約3週間のさまざまな体験は、生涯忘れられない貴重な“巡礼の旅”

# Interview

のような感じがしてなりません。滞在中、私は山梨県の日蓮宗総本山の身延山久遠寺参拝、静岡県  
の浜北教会での宿直体験、新潟県十日町市での  
生誕地まつりへの参加、また杉並教会での手どり  
や法座修行、年回供養などの布教実習に加え、  
“巡礼の旅”の締めくくりとして杉並教会の皆さん  
と一緒に本部のお会式・一乗まつりの行進の隊  
列に加えていただくことができ、本当に心から感謝  
しています。今後は本部での修行体験や日本の  
会員の皆さんとの出会いから学んだことをイタリア  
のサンガの皆さんに共有していきたいと思ってい  
ます。

**法華経の中で心に留めている経文や教えを聞か  
せてください。**

法華経はすべての品が素晴らしく、感銘深い経  
文も数多くありますけれども、私が最近、特に心に  
深く刻みつけているのは如来神力品第二十一で  
す。この品は、仏さまが地中から湧き出た上行菩  
薩をはじめとする地涌の菩薩たちに法華経を未来  
へ伝える使命を託す重要な品として知られていま  
すが、それはそのまま今を生きる私たちへのメッ  
セージのように思えてなりません。日本だけでなく、  
イタリアでもフランスでもスペインでも世界中ど  
こにいても、仏さまが「自分が今いる場所で一生懸  
命法華経の教えを伝えていきなさい」と私たちに

励ましのメッセージを送ってくださっているように感  
じます。その意味で私は今、この如来神力品をと  
ても大切にしています。

**最後に今、最も願っていること、さらに将来の夢を  
聞かせてください。**

ウクライナやパレスチナではいまだ戦闘が長期  
化し、世界は残念ながら分断と対立が進み、混沌  
とした状況が続いています。かつて脇祖さまを通じ  
て「立正佼成会をもととして法華経が世界万国に  
広まる」という神示がありましたが、私は今日こそ立  
正佼成会が世界に向かって法華経の教えを広め  
る使命と役割があると強く感じています。そうしたこ  
とを踏まえ、今、私がいちばん願っているのは、  
ローマを中心にしてサンガの結束と成長・発展を  
目指して、法華経を布教していくこと——それは  
私たち一人ひとりが仏さまの智慧と慈悲を身につ  
け、多くの人々に教えを伝えていくことにほかなり  
ません。また理想はとても大きいのですが、夢は  
ローマで教会長をさせていただくことです。そのた  
めにもこれまで以上に日々の修行の中で法華経  
を学び、実践するとともに、サンガの皆さんと力を  
合わせて布教伝道に取り組み、多くのイタリア人を  
幸せに導いていけるよう精進していきたいと思っ  
ています。



ローマ法座のサンガと（右から4人目）



## 十如是：因と縁

先月に引き続き、立正佼成会の国際アドバイザー、ドミニク・スカランジェロ 博士による「即是道場(Practicing the Dharma in the Here and Now)」を掲載します。即是道場は法華經の「如来神力品第二十一」に示される「道場觀」——あらゆる場所が修行の場になり得るという教え——に由来しています。即是道場は、家庭や職場、学校など、日常生活のどのような場所でも教えが実践できるよう、私たちの背中をそっと押してくれる教えです。



ドミニク・スカランジェロ博士

今回は「如是因」と「如是縁」について考察し、日々の生活でご法を実践するために、因と縁を知ることがなぜ大切なのか考えたいと思います。

3月号では、私たちの行動には原因(因)があり、その原因のありかを突き詰めると自分自身の内面、つまり心の性質(性)にあることを学びました。このことを正確に理解することが大切です。私たちは日頃さまざまな物事や状況に遭遇しますが、その一つ一つが条件(縁)となり、私たちの心の状態から生じるポテンシャル(力)が、具体的な行動(作)となって外界に現れてきます。そしてその行動が、次には外界に影響を与える原因(因)となるのです。

原因が自分自身の中にあるからといって、私たちの生活が周囲の影響を受けることも、選択の自由を制限されることもないと考えれば、それは誤解です。仏さまの教えはさまざまな問題を生み出す構造的、社会的な要因の存在を否定するものではありません。しかし、直面する状況が厳しくても、それにどう対応するかには幅広い選択肢があります。つまり、苦しみを深める対応の仕方もあるれば、苦しみを軽減し、救いに導くものもあるのです。

人生苦に直面した時、「原因は自分自身の中にある」と受け止めることは、決して消極的な態度ではありません。むしろ、その逆です。原因が自分自身にあるということは、私たちが常に行動の主体であることを示すものであり、私たちに力を与えてくれるものなのです。そこから生まれる心の自由は「如是性」の一側面として、私たちが自他共にさらなる幸せを得ようと行動する力を生むのです。

開祖さまは因と縁の交わりについて、次のような説明をされています。満員電車の中で座っていた少年(因)が、足腰の弱ったお年寄(縁)が立っていることに気づき、即座にそのお年寄に席を譲ったというお話を例に、

少年の優しい心(性)に、高齢者に席を譲ろうとする心の動き、すなわち思いやりの心を行動に移すポテンシャル(力)が生まれ、少年がそれを実行した(作)ことで、今度はその行動が因となって、世界に良い変化の連鎖が起きていくこととお話しされたのです。

光祥さまは、スーパーなどのお店のレジを例にお話をされています。いくつかのレジが空いているとき、私たちはふつう、いちばん感じのよさそうな店員のいる列を選びます。

しかし、もし私たちの心が「人を幸せにしたい」という菩薩の願いに満たされているとしたら、選択は変わります——私たちは、どこか元気のなさそうな店員のいるレジへ向かい、やさしく微笑みかけるのです。

確かなことは分かりませんが、もしかすると、私たちが店員に向けた微笑みが、その人の一日、あるいは人生さえも変えるかもしれません。法華經の「方便品第二」に、たとえどんなに小さな徳行であっても、人々はその行ないを契機に仏道に入り、ついには仏の悟りを得ると書かれているように、私たちの微笑みがバタフライエフェクトを起こし、嵐ではなく、より良い世界を作る因と縁の連鎖を引き起こすかもしれないのです。



十如是では、そのような変化がもたらすものを「如是果」「如是報」と呼びます。この二つについては、次号で詳しく考察していきましょう。

最後に、「如是因」と「如是縁」を理解することが、私たちが集諦を実践し、苦の根源を明らかにするために有用であるという点について考察したいと思います。

以前、私は友人からこんな指摘をされました。ふだんは忍耐強くめったに怒らない私が、ある時ごく些細なことで驚くほど腹を立てたことがあったということです。

思い返してみれば、当時取り組んでいた翻訳について、締め切りまでまだ何週間もあるにもかかわらず、ある同僚から何度も進捗を尋ねられ、それがとても煩わしく感じられて、つい腹を立ててしまったことがありました。友人から、あの時どうしてあんなに怒ったのかと尋ねられ、自分の心の状態(性)を振り返ってみました。そこで気づいたのは、当時の私はその同僚の様子から、私には翻訳を最後まで終わらせることができないと思われているのではないか、信頼に足らない頼りない人間だと判断されているのではないか、と感じていたことでした。

私はなぜ同僚の言動をそこまで深読みしてしまったのでしょうか。その時の心の状態から目をそらさず、より深く見つめていくと、子どもの頃に経験したある感情が

もとになっていることに気づきました。それは、当時ある大人から、この子は「能力がない」「頼りにならない」と言われ、軽視された時に抱いた感情でした。

さらに内省を重ねていくうちに、その時に受けたつらい言葉を、自分を守るために忘れようとして心の奥にしまい込んでいたこと、そのため今でも自分が信用されていないと感じた時、怒りの感情で反応してしまう傾向があることに気づいたのです。

ふだんは我慢強い私ですが、自分の中に確かに怒りのポテンシャル(力)が存在し、特定の条件——信頼されていないと感じる状況——に直面した時、怒りが表出する傾向があることに気づきました。このように、ある特定の状況が潜在している怒りを表出させる条件(縁)となり、葛藤や苦しみが生じるのです。究極の原因はまさに私自身の中にあり、この苦しみを乗り越えるためには、過去から残る心の痛みや、傷ついた自尊心と向き合わなければならないと感じました。

この経験をみなさんと共有したのは、自らの行動自体だけでなく、さまざまな条件(縁)に自分がどのような反応を示すかに注意を向けることで、集諦を実践し、なぜ自分がそのように感じ、行動するのかを理解できることを学んだからです。十如是は単に抽象的な教義ではありません。この教えは、四諦の法門をそのまま生





## サンガの現場レポート

ニューヨーク教会教会長 ジェームズ・リンチ

はじめに、私の経験と学びを皆さまにお伝えする機会を頂いたことに感謝申し上げます。

今回のテーマである「如是因」「如是縁」の教えについて、私はかつて経験した大学の同僚との出来事を振り返ることで、深く考える機会を持つことができました。

大学で教職に就いた頃、同僚の一人がメンター（指導教員）として私についてくれました。しかし、私たちの関係は決して円滑とは言えず、私はその同僚から誤解されたり、不当な扱いを受けたりしていると感じることが度々あり、時には私について事実と異なる報告がされていると思ったこともありました。その後、時を経て私たちの関係は徐々に変化し、最後には私が同僚を指導する立場になりました。しかし、私が同僚に抱いていた印象は容易には消えず、滓のように心の中に残っていました。

ある時、その同僚が私の役職の候補者として検討されていることを知りました。その瞬間、私は同僚の意図をあれこれと想像し、頭の中で勝手にストーリーを作り上げていました。心の中にかつての感情がよみがえり、私は過去の経験というフィルターを通して、再び同僚が計算高く、私を陥れようと策略しているのではないかと疑い始めていました。気づかないうちに、生きて変化している一人の人間を、過去の出来事を通して作られた固定的なイメージにはめ込もうとしていたのです。

すると、その後、思いがけないことが起きました。その同僚から連絡があり、二人だけで話ができないか尋ねられたのです。しばらく雑談を交わしたあと、同僚は家族との間で抱えていた極めて個人的で深刻な問題を私に話してくれました。私はその時、同僚が打ち明けてくれた話の内容だけでなく、私に寄せてくれた信頼の深さに心を打たれました。

同僚の話聞くうちに私の中にある何かが和らぎ、目に涙がにじむのを感じました。その瞬間、私一人では見えなかったものに、同僚という縁を通じて気づかせてくださった仏さまのお計らいを感じ、謙虚な気持ちになると同時に、感謝で胸がいっぱいになりました。同時に、私たちにとって最も根本的な教えの一つである「すべては一つ」と

いう教えを、自分がいとも簡単に忘れてしまっていたことにはっとしました。目の前にいる同僚は私が想像で作りに上げた人格ではなく、現実には苦しみを経験し、助けを必要としている一人の人間なのだ——そう気づいた瞬間、固定的な条件として見ていたものが、実は今も変化し続けている縁であることがわかったのです。

さらに深く考えると、因と縁は固定的なものでも、一方向的なものでもなく、互いに流動し合い、相互の関係の形成と再形成を繰り返していることがわかってきました。私が同僚の行動に影響を受けたのと同じように、私の反応は同僚に影響を与えており、同僚が私の成長の因であったように、私もまた同僚の成長の因となっていたのです。

私がそれまで相手にしていたのは、今のこの瞬間の同僚ではなく、過去の出来事をもとに作り上げていた同僚の姿でした。

固定観念にとらわれず、心を開いて現状に向き合えたとき、同僚との関係だけでなく、私自身の心にも変化が訪れました。手に負えないように思えた事態や、抵抗して身を守らなければならないと感じていた状況が、思いやりを実践する機会へと変わったのです。

この経験は、私たち仏教徒の修行が、抽象的なものでもなければ、日常生活から切り離されたものでもないことに、改めて気づかせてくれました。自分が因と縁にどう反応しているかが見えてくると、私たちがいかに自分の見方で他人を固定化するパターンに陥りやすいかがよく見えます。それと同時に知るべきことは、日々の生活や修行を通じて、私たちにはそれとは異なった反応をする自由が常に与えられているということです。

このように、人生とは固定的なラベルで定義されるような静的なものではなく、あらゆる思考、言葉、行動が作り上げる生きた流れなのです。たとえ困難な状況であっても、私たちが気づきと慈しみの心をもって縁に向き合えば、私たち一人ひとりの人間関係が変わるだけでなく、そうした関係が展開する世界そのものを変化させていくことができるのです。



## 仏さまの衣を着る

### 「柔和」が人間関係の大事

立正佼成会開祖 庭野日敬



地方布教に訪れた開祖さまと脇祖さま（1952年、茨城県）

いまの日本で、多くの人がいちばん求めているものは何かと考えますと、つまるところは精神的な安らぎ、精神的な豊かさだと思います。なかでも人間関係は最大の関心事で、まわりの人たちとのあいだに、なごやかな心のふれあいをもちたいというのが、多くの人たちの願いでしょう。

私たちはとかく、「自分の力で、自分の人生を生きている」と考えますが、人生は、そんな簡単なものではありません。

よくいわれることですが、「人」という字は、一本の棒をもう一本の棒が支えています。この字の成り立ちが教えているように、人は互いに寄り添い、支え合うことで人となっていくのです。

ところで、棒の長さには長短の差があります。長いほうが主役、短いほうが脇役でしょうか。そう考えてもいいのですが、支えているようでいて支えられている、支えら

れているようで支えている、というのが人間関係の実際でしょう。支え合うことの尊さに、何らの違いもないのです。

ですから、「自分は多くの人に支えられて生きているのだから、自分もまた、まわりの人を支えるような生き方をしよう」と考えるのが、ごく自然な考え方といえるでしょう。たとえば、自分がだれかの役に立てたとき、何ともいえないうれしい気持ちがこみあげてきます。そういう喜びは、だれしも体験されているはずです。

そこで、自分のまわりになごやかな人間関係を広げていくヒントとして、みなさんに考えていただきたいのは、法華經の「法師品」にある「如来の衣を著」という一句です。

「如来の衣」とは何かについて、お経文には、「如来の衣とは柔和忍辱の心是れなり」と説かれています。

「柔和」というのは、文字どおり柔らかで、なごやかな心です。人と対立して、批判したり刺したりするようなトゲトゲしい心でなくて、まわりの人を大きく包みこみ、出会った人たちと大きく調和する精神です。

これからの時代は、「自分の力で生きている」という考え方ではなく、「すべての人、すべてのものに生かされている」という考え方が大事になっていきます。この「生かされている」という思いが、「如来の衣を着る」という言葉に象徴されていると思うのです。

お釈迦さまやそのお弟子たちが着た衣は、遺体を包んで墓場に捨てられたものや、ごみ捨て場などで拾ってきた古布などを洗い、傷んでいないところを切りとって、縫い合わせて作ったのです。それを赤土で泥染めした黄土色のものでした。それは、「世間の人に生かされている」「縁あるものに支えられている」という謙虚な気持ちの実践だったのです。

私たちにしても、自分を生かしてくれているのは何かということを追究していくと、結局は、「神仏と天地の万物・万人に生かされている」という思いに到達せざるを得ません。そして、「生かされていることを素直に受けとるのが、幸せになる最上の道だ」という真実に帰着するのです。

「自分は生かされている」と思うと、対立、競争、批判などの気持ちは微塵も湧いてきません。ただただ「ありがたい」と、感謝の念が湧いてきます。すると、その人の心はおのずと柔和になります。そういう心は自然に表情や言葉つき、行動に表われて、接する人に快い感じを与え、そこに正しい人間関係が生まれるのです。

## 静かに咲く堇のように

国際伝道部長  
前田 貴史

皆さん、こんにちは。今月はお釈迦さまがお生まれになった月です。英語で4月を表す「April」という言葉は、ラテン語の「開く」を意味する動詞「aperire」に由来すると言われていいます。春は花が開き、いのちが芽吹く季節です。この時季にお釈迦さまが誕生されたことに、私は深い意味を感じます。

会長先生のご法話に登場する「堇」は、目立たなくともたくましく生き、人の心をそっと慰める存在として紹介されています。今は成果や評価がすぐに見える時代で、「もっと上へ」と急ぎがちです。しかし堇は、他と比べることなく、自分の場所で、時が来れば静かに花を咲かせます。風に吹かれてもしっかりと根を張り、小さくても確かな力を示し、私たちに静かな勇気を与えてくれます。日々の暮らしの中で、誰かのためにそっと力を尽くす人の姿にも、同じ尊さがあるのではないのでしょうか。

お釈迦さまが誕生のときに発せられた「天上天下唯我独尊」は、一人ひとりのいのちが、かけがえのない尊い存在であることを教えています。決して、自分だけが偉いという意味ではありません。だからこそ、他人と比べるのではなく、それぞれが自分の場所で力を尽くせばよいのです。

小さな喜びや出会いを大切に重ねていくことが、私たちの心を耕します。会長先生がご法話で示してくださったように、今月は堇のように、自分らしく、誇らず、争わず、歩んでまいりましょう。その積み重ねが、私たちの仏性を静かに輝かせ、やがて周囲をやさしく照らしていくのではないのでしょうか。



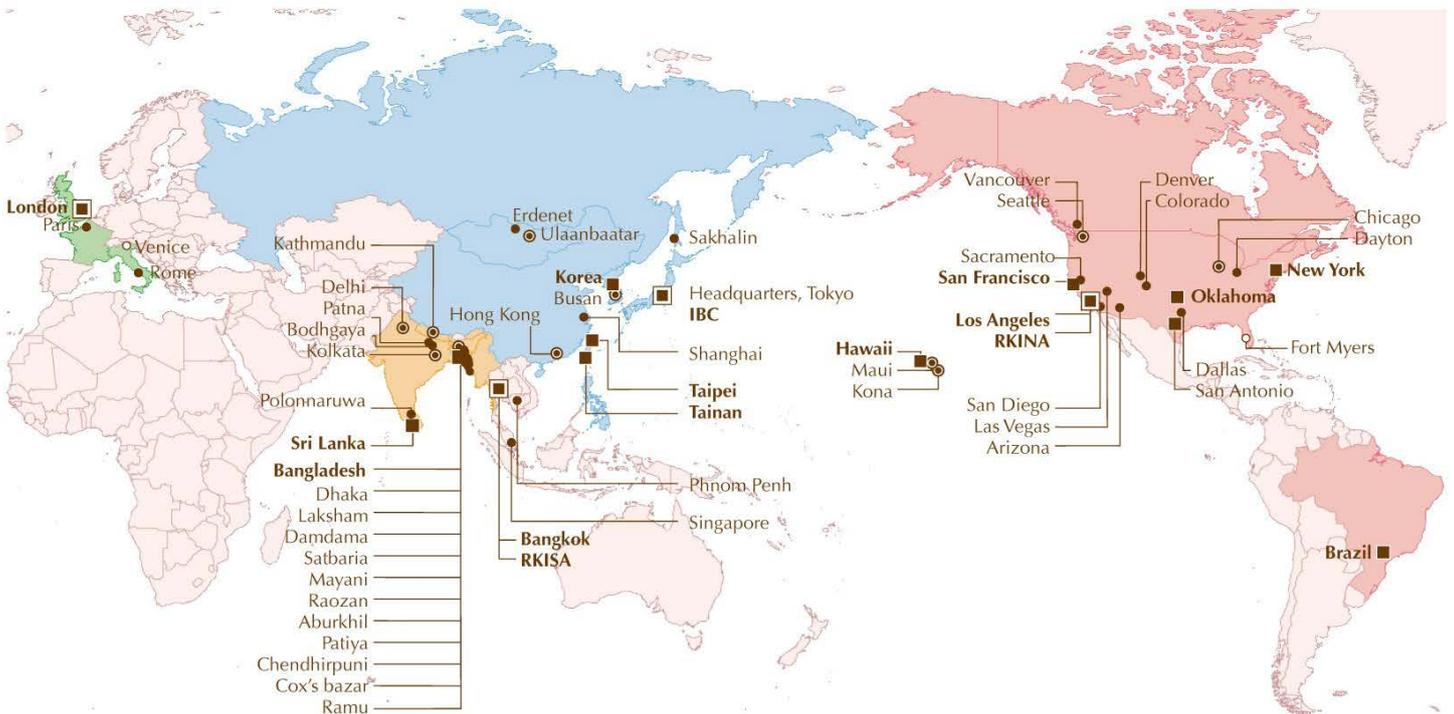
3月12日、大聖堂での体験説法のためスリランカ教会から来日されたデルゴダ・スワルナ・パドミニさん(前列中央)を国際伝道部のオフィスお迎えして(前列左が前田部長)

# Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter



## 🌸 A Global Buddhist Movement 🌸



Information about local Dharma centers



facebook



X



✉ We welcome comments on our newsletter Living the Lotus: [living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp](mailto:living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp)